学 位 論 文 要 旨

氏 名 横田 咲樹

題 目 幼児造形教育における諸課題の抽出と身体内部のイメージを描画する保育実践の提案

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

保育実践では、複数の出来事が同時並行で生じ、幼児は、総合的・一体的に学ぶが、学術研究や保育者が持つ知識の段階では、各論的な議論を基盤として、総論を行う必要がある。つまり、各活動でしか引き出せない学びの検討や、活動毎の幼児の発達過程が解明された上で、保育の省察と立案を行うことが理想であるとする。また、保育全体において、調和的で縦断的連続性のある学びを生じさせるためには、包括的な議論だけではなく、各論的な研究成果が必要であると考えられる。

そこで本論文は、幼児期の造形活動を議論の枠組みとし、幼児造形教育の課題の抽出を行う。具体的には、これまで焦点が当てられていなかった造形活動の特質や幼児の資質・能力を見出し、造形活動の教育効果を再検討することで、保育の質の向上を目指す。造形活動の独自性を前提とし、教育効果を検討することは、幼児の多様な経験と心身の調和的な発達に資すると考えられる。

各章は、次のような内容で構成される。

第1章は、社会問題と保育の関係を示し、問題の所在と本研究の枠組みを提示する。第1節では、日本国の喫緊の課題を背景に、現代社会において求められる保育の質の確保と向上について示す。第2節では、研究の目的及び内容構成を提示する。本研究の目的は、幼児造形教育の今日的課題の抽出であり、課題の抽出は、[1]「色」「形」「手触り」という造形物の特質、[2]用語「造形遊び」に着目した幼保小間の学びの連続性、[3]幼児造形教育による思考力育成、という3つの観点で行う。[3]については、課題解決に向けた保育実践研究による試論的検討をする。

第2章では、造形教育における基本的な学習の要素である「色」「形」「手触り」に着目して、研究成果を整理する。第1節では、幼児期における色彩教育の研究動向について考察する。先行研究は、「発達」「嗜好」「教育」の範疇で分類することができるが、現在の研究成果は、単発的で現状の把握に停滞し、教育の改善を目的とした研究が不足している。そこで、研究成果と今後の課題を整理しながら、色彩教育の枠組みを提示する。第2節では、幼児造形教育における形の学びについて、見立て、平面、立体の3つの視点から考察する。第3節では、用語「手触り」が指し示す意味内容を、関連研究から抽出すると共に、見出された意味内容を視点として、幼児造形教育の課題を論考する。用語「手触り」を捕捉する視点として、「感触」「素材特性の一部」「認知の基礎」が導出できる。この3点は、学びの読み取り、保育の構想、研究成果の累積における考察項目になると考えられる。

第3章は、造形教育における幼保小間の学びの連続性に関する課題を抽出するために、用語「造形遊び」に着目する。第1節では、幼児教育関係告示文と『小学校学習指導要領解説図画工作編』の記述を中心に吟味し、幼保小間の接続や連携の問題の所在を模索する。第2章では、小学校図画工作科教育における造形遊びを中心に、用語「造形遊び」に対する研究者の概念整理を行い、幼保小連携教育の課題を検討する。

第4章は、思考力の育成を観点として、課題の抽出及び保育実践の試論的な検討を行う。第1節では、思考力育成の観点から、造形活動を捉える視点を考察する。具体的には、先行研究の概観によって、造形活動に視覚や触覚による物理的な直接体験が含まれること、造形活動の過程に思考や心像 (image) の具現化があることを見出す。また、幼児造形教育に不足している観点を論考する。第2節では、造形的思考力を育成する保育の具現化に向けた試行的考察と、第3～5節の実践研究の手順及び概要を説明する。実証データの収集のために行った保育実践は、「発熱する自分」「腹痛時の自分」「消化吸収排泄する自分」「嘔吐する自分」「運動直後の自分」(順番は、実践を行った順)を主題とした描画活動であり、保育施設4・5歳児学級を対象としている。第3節では「消化吸収排泄する自分」、第4節では「発熱する自分」、第5節では「嘔吐する自分」を考察対象とする。また幼児は、知識や経験や身体感覚を基に、想像した身体内部を描画表現できることを明らかにする。さらに、幼児期の造形教育は、表現の楽しさや面白さを味わうことだけではなく、思考力の育成という観点からも、保育実践や学術研究を推進する必要性を示す。

第5章は、第2～4章の研究成果を纏め、各章各節の結果を総括すると共に、幼児造形教育を捉える新しい視点として、造形的思考力の構造のイメージを提言する。まず、第2～4章において見出された課題の共通点として、研究数の少なさと研究成果の拡散があることを述べる。第2節では、幼児造形教育における用語の整理と学術用語の確立の必要性や、保育の横断的連続性と縦断的連続性について言及する。また、各節で明らかになった課題や、再確認された造形活動の特質を背景に、本論で考察した範囲で、造形教育における思考力育成のイメージを示す。さらに、造形活動は、思考力と表現力の両側面から捉え、実践する必要があることを考察する。